科学という現代の神話からの解放のために
―ドイツ観念論の限界と哲学者の責任に関する考察―

吉田　一生

„Im Augenblick, wo dem philosophischen Gedanken nichts passieren kann, das heißt, wo er bereits im Bereich der Wiederholung, der bloßen Reproduktion angesiedelt ist, in diesem Augenblick hat die Philosophie ihren Zweck bereits verfehlt.“

Theodor W. Adorno

はじめに

世界は2020年初頭からパンデミックに見舞われ、筆者が本論文を執筆している2021年7月30日時点の記録で420万412人が亡くなられた。[1] 人道的観点から一人でも多くの命を救えるよう、各国政府並びに市民一人一人が感染症対策への努力を継続しなければならないことは言うまでもない。さて、ここでは、パンデミックが私たちの生活、文化、社会に様々な変化をもたらしていることに目を向けたい。[2] 大学も例外ではなく、授業のあり方はもとより、学問の果たす役割も再定義を迫られている。この有事において学者は、もはや観察者・傍観者ではいられなくなっている。

当初、欧米の国家指導者は新型コロナウイルスとの戦いを宣言した。[3] マクロン仏国大統領にいたっては、「敵は見えないが、前進している」と

1)　世界保健機関、CEST午後6時30分発表。（https://covid19.who.int）

2)　さしあたって、文化を生活の実質的側面、社会を構造的側面と定義したい。

3)　「トランプ米大統領『戦時下』の態勢と新型コロナウイルス対策で」、BBC、2020年3月19日。（https://www.bbc.com/japanese/51956037）

まで表現していた。[4] 都市封鎖で国民が戦時下に近い生活を強いられ、医療崩壊において死者が急増したことがそういった発言の背景にあった。日本では当時、某県知事が医療従事者を「コロナファイター」を命名し批判を浴びた。[5] 最近でも、パンデミック下における東京オリンピック開催の意義について、「人類が新型コロナウイルスに打ち勝った証」と首相は衆議院本会議で説明していた。[6] しかし、私は問いたい、ウイルスはそもそも自然現象ではないのかと。人類がその生存を確保、促進することもまた自然なことであるが、ウイルスは人類の「敵」ではないし、ましてウイルスとの「戦争」などということは馬鹿げている。そういった言葉は、実は、私たちが現代において自然とどのような関係にあるかを暴露している。

以下の論文は、筆者が2017年3月にICU哲学研究会で発表した研究成果を基に執筆したものであり、表向きは、シェリングの啓示の哲学の哲学史における意義を現代という地平に立って考察するという体裁を取っている。その際、筆者は、『シェリング後期哲学におけるドイツ観念論の完成』というシュルツのテーゼを一貫して支持していて、同後期哲学の核心である啓示の哲学に西洋哲学史の臨界点があると考えている。本論ではまず、『啓蒙の弁証法』を執筆したアドルノ及びホルクハイマーと問題意識を共有しながら、現代の技術的理性（die technische Vernunft）と学問の神話を批判する。正確に言うと、それは科学の或いは科学の学問観に大き

---

4) 「仏大統領、外出制限発表　新型コロナで『戦争状態』」、ロイター、2020年3月17日。（https://jp.reuters.com/article/health-coronavirus-macron-restrictions-idJPKBN21401T）

5) 「医療従事者らに、『コロナファイター』と命名、『軽はずみ』『不謹慎』と批判」、読売新聞、2020年4月4日。（https://www.yomiuri.co.jp/national/20200404-OYT1T50157/）

6) 「菅首相、再び『コロナに打ち勝った証しの五輪』と発言、衆院本会議」、毎日新聞、2021年4月20日。（https://mainichi.jp/articles/20210420/k00/00m/010/266000c）

な影響を受けた学問の神話であるが。[7)]

新型コロナウイルスへの恐怖と不安から人々はより一層、「専門家」を信奉するようになった。そして自らを客観的と標榜する科学は、政策決定の場から市民生活の端までその支配を強めている。政治家は「エビデンス」という言葉を多用するようになった。科学の主導によって画一化された感染症対策は、当初、スーパーの買い物かごや学校の机を一つ一つ消毒することまで要求していた。このような理性の形骸化・硬直化は、科学者には逆説的に聞こえるかもしれないが、実存から無意識の世界を排除しようとした結果だと筆者は考えている。

精神と自然の根源的対立にこそダイナミックな生命の営みがあること、そして真の対立はより高い一致がなければ不可能であること、そういった人類の叡智は忘れられ、自然はもっぱら支配の対象となり、意識は中和されて、意味は相対化されていった。個性を抑圧するような社会においては精神疾患がむしろ精神の健康を示しているとフロムは示唆している。[8)]

他方、スマートフォンによって絶えず刺激されているような大多数の人間の無意識的な意識が絶望することはほとんどないと言えるかもしれない。個人が本当の意味で自己に注意を向けることが求められている。その上で、成熟した自己意識が存在するものの統一としての理性の根拠を問うことは、それは理性的存在者たる人間自身に向けられた問いであるから、同時に、人類の歴史の起源や目的を問うことでもある。その問いは、もし

---

7) 大学や学会において今日科学的と呼ばれていることは、自然科学の実験再現性や反証可能性を根拠としていて、一部の社会科学もデータを用いることでその科学性を担保しようとしている。一方、神学や哲学、文学は、学問であっても、科学的である必要は全くないのだが、人文学（Humanities）の側が形式的に人文科学（Human Science）を志向してしまう傾向がある。そこではデータの代わりにいわゆる二次文献が用いられ、学術研究の発表や評価が、分野を問わず、仮説と検証という思考方法に一律化してきているし、この影響は中等教育における総合学習にまで及んでいる。

8) Vgl. Fromm, Erich. *Escape from Freedom*. New York: Rinehart & Company, 1941, S. 136-141.

答えられうるとすれば、啓示によってのみ答えられることを、本論では次に、知識と信仰の問題として議論したい。

キリスト教をある概念を手掛かりとして認識の対象とする哲学は啓示の哲学と呼ばれうる。しかし、例えばシェリングの良き理解者でもあり批判者でもあったエッシェンマイヤーは、そのような哲学を純粋神学（Reine Theologie）と呼び、シェリングの哲学に大きな影響を受けたティリッヒは組織神学（Systematische Theologie）を展開した。[9] シェリングが何故、あくまで啓示の「哲学」にこだわったのかを考えた時、それは哲学一般ではなく、特定の哲学、理性の哲学を指していることが明らかになってくる。というのも、主体は哲学者個人でも現存在でもなくあくまでも普遍的理性であり、歴史もまた理性のアポステリオリな構成だからである。本論文でも、啓示の哲学と言った時、それが理性の哲学に基づいているという立場を堅持している。

そのような理性、経験的認識の制約を超越しようとする、学問を自ら基礎づけようとする、精神と自然の同一を自ら実現しようとする、そして、歴史や宗教を敢えて把握しようとするような、そのような理性概念は昨今の哲学界では死語になりつつあり、形而上学の研究は古典の研究から文献の研究に移りつつある。そこで、読者には是非ショーペンハウアーの次の言葉について、その真実性を考えていただきたい。「現存在の虚無性はその形式全体に表現されている。時間と空間の無限性に、そしてそれらに対する個体の有限性に。現実性の唯一の存在様式としての持続のない現在に。事物の依存性と相対性に。存在ではなく絶え間ない生成に。満足することのない終わりのなき欲望に。そして臨終まで人生を常に脅かしている死という障壁のうちに」（筆者意訳）。[10] 現存在が投げ出されているところ

---

9) S. Eschenmayer, C. A. *Die Philosophie in ihrem Übergang zur Nichtphilosophie*. Erlangen: Walthersche Kunst- u. Buchhandlung, 1803, S. 1.

10) Schopenhauer, Artur. *Parerga und Paralipomena II*, Kapitel 11: Nachträge zur Lehre von der Nichtigkeit des Daseins. Stuttgart: Shurkamp Taschenbuch

の世界そのものが意味を持ちうるためには、超越的な何かが存在がしなければならない。これは全ての有限な理性的存在者の切実な要求であり、それに何らかの形で答えることが哲学のレゾンデートルなのである。それにもかかわらず、批判哲学の結論、私たちは超越的存在をアプリオリに認識できないということ、このアプリオリにという条件が勝手に取り払われて、一部の哲学者の間では、その対象を認識できないということがそれは存在しないということにすり替えられてしまっている。こうした流行に抵抗しながら、本論文の最後では、形而上学の限界を主観性の循環を手掛かりに見極めたい。また、理性哲学、否、哲学そのものに対して「私」はどのように関わるのかということをその循環の弁証法的側面から考察したい。

2021年の東京オリンピック開催の是非が議論された時、政府の新型コロナウイルス対策分科会会長の尾身氏は、次のように語っている。「リスクを評価するというのが、われわれの責任。われわれの評価をどう採用するかは政府、主催者の責任。責任と役割があきらかに違うと思う。」[11] これはなるほど科学者としては模範回答であるが、一人の人間として、或いは一人の医師として、オリンピック開催による感染拡大とそれに伴う死者増大というリスクを前に、同じことが言えたのかは疑問が残る。 はたして私たち哲学者も、発表や論文を「評価」するだけで良いのだろうか。専門家になってしまうことで、哲学の本来の目的が失われてしまうのではな

Verlag, S. 334. – „Diese Nichtigkeit findet ihren Ausdruck an der ganzen Form des Daseins, an der Unendlichkeit der Zeit und des Raumes, gegenüber der Endlichkeit des Individuums in beiden; an der dauerlosen Gegenwart als der alleinigen Daseinsweise der Wirklichkeit; an der Abhängigkeit und Relativität aller Dinge; am steten Werden ohne Sein; am steten Wünschen ohne Befriedigung; an der steten Hemmung des Sterbens, durch die das Leben besteht, bis dieselbe einmal überwunden wird.“ (Ebd.)

11) 「尾身会長が会見　五輪『開催中止』盛り込まず　菅首相が開催表明で『意味為さず』」、東京新聞、2021年6月18日。（https://www.tokyo-np.co.jp/article/111376）

いか、それを本論文は筆者自身と読者にまっすぐ問うている。

啓蒙の弁証法から見る理性の歴史的状況

現代では、一部の動物の権利が「人権」にまで高められ、私たちの人権は、多くの国で死刑が禁止されるほどにまで、絶対化されている。このような傾向はある意味、神話の再現ではないのだろうか。[12] シェリングのポテンツ論を援用するなら、神話においては理性のそれぞれのポテンツ（Potenz）、つまり存在可能性（das Sein-Könnende）が崇拝の対象となる。存在可能性とは規定されたものであり、存在そのものではなく個別に存在するものが崇拝されるところに、偶像崇拝の特徴がある。それは結局、理性の自己崇拝である一方、統一が達成されない限り、理性の自己分裂、自己疎外、自己忘却であると言える。理性概念が知的活動に制約され、動物の権利がその知性を基準に語られているところに注意されたい。

シェリングの神話の哲学によると、神話のプロセスは、人間の根源的な行為の結果として、必然的に展開していく。もう少し詳しく説明すると、人間が実在的原理（das reale Prinzip）を神の存在の外に開放すると同時に、それを再び神の存在の内に戻そうとする観念的原理（das ideale Prinzip）が働き、その両原理のダイナミックな対立と総合のプロセスが、人間の意識の中で繰り返されるものが神話である。実在的原理を自ら支配することによって、人間は神のようになることを試みたのであるが、人間の意識は、その本来の意図に反して、実在的原理に隷属することになる。なぜなら、自然のプロセスの最後に創造される人間よりも、自然そのものの原理である実在的原理の方がはるかに強力であるからだ。[13] 歴史におい

---

12) Yoshida, Issei. „Animal and Human Rights: Mythology of the 21st Century?“, vorgetragen am 24. August 2014 in New York City beim North American Schelling Society.

13) Vgl. Schelling, F. W. J. *Philosophie der Mythologie*, in: Sämtliche Werke Band. XII, hrsg. v. K. F. A. Schelling. Stuttgart: J. G. Cotta'scher Verlag, 1857, S. 155.

て、キリストの死と復活によって、この原理が克復されたとしても、個人や社会的集団のレベルにおいて神話的契機は繰り返されている、つまり、人類の救済と個人の救済はイコールではないと筆者は考える。

実在的原理とは、客観的原理であり、自然の最初の段階では、膨張する力（die expansive Kraft）として、反発する力（die repulsive Kraft）として、更に有機的自然においては、差別する力（die differenzierende Kraft）として働く。シェリングの有名な論文、『人間的自由の本質について』では、根底（Grund）と名付けられているものである。これは確かに精神がそれに対するコントロールを失った時、悪の原理になりうるが、実在的原理自体は本来、善でも悪でもなく、生命の原理である。この点に十分留意した上で、次に、啓蒙を神話との対比の中で特徴づけたい。

アドルノとホルクハイマーは、ナチスによるユダヤ人虐殺の問題から出発して、何故、啓蒙されたはずの人類がそのような野蛮な行為を遂行できるのかを、心理学や社会学の成果を用いながら、歴史哲学的に問い直した。彼らの『啓蒙の弁証法』を貫いている基本的立場は、啓蒙が神話に陥ることを批判していると同時に、啓蒙がそもそも神話から生じたことを指摘している点だ。

啓蒙が神話から生じたとはいったいどういうことか？まず、「啓蒙のプログラムは世界の非神秘化であった」と述べられ、「世界の非神秘化はアニムズムの根絶である」と見なされる。[14] 啓蒙は決して18世紀から19世紀固有のアカデミックな運動ではなく、ギリシア哲学から、更に、ギリシア神話からの西洋の歴史が啓蒙の歴史であることを、アドルノとホルクハイマーは、特に『オデュッセイア』を分析しながら主張する。オデュッセウスが彼の知性と策略を以て、神話の世界から脱出していくことから、啓

14) T. W. Adorno u. M. Horkheimer, *Dialektik der Aufklärung*, in: Theodor W. Adorno Gesammelte Schriften Bd. 3, hrsg. v. R. Tiedemann. Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1984, S. 19 u. 21. – „Das Programm der Aufklärung war die Entzauberung der Welt.“ (S. 19.) „Die Entzauberung der Welt ist die Ausrottung des Animismus.“ (S. 21.)

蒙というプログラムがそもそも学問のためではなく、生存のために実行されてきたことを、彼らは明らかにしようとする。「神話は啓蒙に移行し、自然は単なる客体となる。人間たちは彼らの増大する力の代償を、その力を行使する当のものからの疎外として支払うことになる。啓蒙は事物に対して、独裁者が人間たちに対するように振舞う」（筆者訳）。[15)]

啓蒙が自然の支配を目指していたのであれば、啓蒙がそこから逃れようと葛藤した神話、そして今も全力で排斥しようとする神話は、自然に対する服従であったと言える。アドルノとホルクハイマーが、啓蒙が再び神話に陥ると言う時、それは、学問、科学、市場、メディアといった巨大なシステムに、人間が盲目的に追従していくことを指している。古代には予言者がいた。現代ではアナリストから、政府と国民の最大の関心事である経済の動向について、予想を聞くことができる。「抽象は、これは啓蒙の道具なのだが、事象に運命のように関係する、運命という概念はすでに抹消されてしまったのだが。つまり、（抽象も運命もプロセスの中に）整理するということなのだ」（筆者意訳、括弧内は筆者の注）。[16)] 人間はそのようなプロセス、その根幹は必然性の反復にあるのだが、その外に何かがあるかもしれないという表象に大きな不安を抱いている。[17)] 啓蒙はその不安を克服できなかったというより、むしろ増大させているというのが『啓蒙の弁証法』の一つの結論だ。

この作品が哲学史において持つ重要な意味は、絶対的理性（die absolute Vernunft）が死語となった20世紀において、理性の絶対性を否定的な形

---

15) Ebd. S. 25. – „Der Mythos geht in die Aufklärung über und die Natur in bloße Objektivität. Die Menschen bezahlen die Vermehrung ihrer Macht mit der Entfremdung von dem, worüber sie die Macht ausüben. Die Aufklärung verhält sich zu den Dingen wie der Diktator zu den Menschen.“ (Ebd.)

16) Ebd. S. 29. – „Die Abstraktion, das Werkzeug der Aufklärung, verhält sich zu ihren Objekten wie das Schicksal, dessen Begriff sie ausmerzt: als Liquidation.“ (Ebd.)

17) Vgl. ebd. S. 32 u. 44.

であってもなおも問題にしている点だ。ホルクハイマーは単著である『道具的理性批判のために』の中でも、『啓蒙の弁証法』の中心的問題に取り組んでいる。彼はまずプラトン、アリストテレス、スコラ哲学、ドイツ観念論における理性を客観的理性と呼ぶ一方、思考回路の抽象的機能を主観的理性と呼ぶ。[18] 客観的理性においては、認識の対象が問題となる限りにおいて、その方法が問題になった。そして、理性は、存在の媒介者として、幅広い意味、機能を有していた。理性が知性に限定され、その知性が思考を意味するようになったのはごく最近のことである。そしてその思考が反省的になること、批判的になることは稀で、理性の直接的な機能である推論（Schluss）だけが形式化される。原因と結果、目的と手段の個々の関係のみに関心が集中し、そのような形式的理性にとって内容は、恣意的なもの、偶然的なもの、または、必然的なものになる。究極的には、学問研究さえも生存のための経済活動の中に組み込まれていく。「今日の理性の危機とは基本的に次の事実に基づいている、つまり、思考がある特定の段階において、上記のような客観性をそもそも構想する能力を失ったか、それを妄想として抹殺することを始めたことにある」（筆者訳）。[19]

ここでのホルクハイマーの関心は、形而上学を再興するというよりも、客観的理性は何故主観化、形式化されていったのか、そしてそれは歴史哲学的に何を意味するのかを批判的に考察することだった。特に注目に値するのは、客観的理性のアプリオリな妥当性は括弧付けられていても、その歴史的働き（ihre geschichtliche Wirkung）が承認されている点だ。絶対的理性という理念がかつて、特に啓蒙の時代に、文化、社会、歴史に大き

---

18) Horkheimer, Max. *Zur Kritik der instrumentellen Vernunft*, in: Gesammelte Schriften Bd. 6, hrsg. v. A. Schmidt. Frankfurt am Main: S. Fischer Verlag, 1991, S. 27-8.

19) Ebd. S. 30. – „Die gegenwärtige Krise der Vernunft besteht im Grunde in der Tatsache, daß das Denken auf einer bestimmten Stufe entweder die Fähigkeit verlor, eine solche Objektivität überhaupt zu konzipieren, oder begann, sie als einen Wahn zu bestreiten.“ (Ebd.)

な影響と変化を与えたことは事実であり、形式化された理性も、その絶対性を別の形で、つまり、芸術や哲学、宗教を通してではなく、科学性と生産性において主張している。

ホルクハイマーの『道具的理性批判のために』（Zur Kritik der instrumentalen Vernunft）は、元々英語で出版され、『理性の没落』（Eclipse of Reason）という表題であった。それを、引用しながらティリッヒは『組織神学』の中で同様の議論を、もう一歩踏み込んで展開している。彼はまず、客観的理性を存在論的理性、主観的理性を技術的理性と言い換えて、後者は前者の一機能であったことを指摘する。[20] そして、ティリッヒは存在論的理性を精神の構造（die Struktur des Geistes）であり、現実性を把握し（ergreifen）、変容する（umformen）ものであると定義する一方、技術的理性の計算や議論をする能力が存在論的理性から独立し、目的のための手段を発見することのみに使用されることを、神学者の立場から警告している。[21] 存在論的理性の否定は非人間的であることが主張されているのだが、逆を言えば、ドイツ観念論、特にシェリングの哲学に倣って、人間の本質は、理性にあることが示唆されている。[22] ここでティリッヒを引用したのは、彼がホルクハイマーと文通をしながら、啓蒙の弁証法のテーゼ、直接的にはホルクハイマーの「理性と自己保存」の論文を冷静に批判しているからだ。「（理性の）普遍的なメカニズムが歴史の最初に転覆しうるという信仰はどこから来るのか？それは原始秩序の奇跡信仰とは違うのか？もしそうでないならば、そのような転換はどのように準備されたのか？（…）自らの自己破壊を叙述する理性は、それができるためには、どこかで破壊されることが不可能な形でとどまらなければならないのではな

20) S. Tillich, Paul. *Systematische Theologie*, Bd. I. Stuttgart: Evangelisches Verlagswerk, 1958, S. 88-9.

21) S. ebd.

22) Vgl. S. 89.

いか？」（筆者意訳、括弧内は筆者の注、下線は原文のイタリック）[23)]

知識と信仰の境界線を再び主題化すること

前項では、フランクフルト学派、特にホルクハイマーの理性批判から、理性が置かれている歴史的状況について確認した。次に考察するのは、理性がその実存において、道具的・手段的（instrumental）である点だ。シェリングの積極哲学では理性は仲介するポテンツ（die vermittelnde Potenz）と定義されている。問題は理性が手段となっていることではなく、何の手段になっているかであり、批判の対象は手段と目的の関係そのものではなく、私たちが歴史の目的をはっきり認識できているかということになる。

積極哲学（Positive Philosophie）、その核心は啓示の哲学であるが、それは、シェリング自らが主導した同一哲学（Identitätsphilosophie）、つまり消極哲学（Negative Philosophie）、或いは理性学問（Vernunftwissenschaft）への批判から始まる。存在するものそのもの（was das Seiende selbst ist）が絶対者だとしても、その理念は、まだアプリオリに思考されたもの、存在可能性（das Sein-Könnende）に過ぎず、実際に絶対者が或いは神が現実的に存在するか否かは歴史を検証してみないと分からない。もちろん、歴史の主体が、ヘーゲルが主張するように理性であったり、マルクスが主張するように人間であったりするかもしれない。また、主体というものはなく、人類共通の歴史というようなものはそもそもないのかもしれない。そのため、シェリングは、積極哲学は自由な学問であるから、それを必要

---

23) Tillich, Paul. „Bemerkungen zu Vernunft und Selbsterhaltung“, in: Gesammelte Schriften von M. Horkheimer Bd. 17, hrsg. v. A. Schmidt u. G. S. Noerr. Frankfurt am Main: S. Fisher Verlag, 1996, S. 327. – „Woher kommt der Glaube, daß der Universalmechanismus in den Anfang der Geschichte umschlagen *kann*? Ist das nicht Wunderglaube erster Ordnung? Wenn aber nicht, wie ist eine solche Wendung vorbereitet? (…) Muß nicht auch die Vernunft, die ihre eigene Zerstörung beschreibt, irgendwo unzerstörbar sein, um das zu können?“ (Ebd.)

としない人は理性学問の立場に止まっていれば良いと啓示の哲学の序論で断っている。[24] しばしば、彼は晩年、独断主義に後退した、或いは神秘主義に逃避したと評価されているが、神が存在するとシェリングはどこにも主張していない。もし神が存在するなら、人類の歴史、そしてキリスト教をどのように説明できるのかということが彼の啓示の哲学の狙いだった。

観念論があらゆる存在を意識の中に定立する一方、積極哲学は、神の外にある存在（das außergöttliche Sein）を事実として一旦承認する。この存在は思考に先立つ存在（das unvordenkliche Sein）とも呼ばれる。ここで注意しなければならないことは、それが第一義的に経験の対象としての外的自然を意味するのではないという点だ。それは思考が、理性が決して演繹できない存在を意味し、究極的には理性自身の事実性への問いになる。[25] 理性の事実性とは今正にそれを語っている私たちの理性、意識であって、思考に先立つ存在、神の外にある存在とは、厳密に言うと人間の実存的意識を指す。そのような意識がそれ自体（in sich）個人的なものではなく、あくまで普遍的なものであること、理性とは個別的意識の集合ではなく普遍的意識の作用であることは、消極哲学と同様に、積極哲学でも前提されている。

さて、消極哲学はその消極性でもって決してその真理が否定されているわけではない。たとえ何も実存していなくても、それは真理であり続けるとシェリングが主張するように、本質（Wesen）と実存（Existenz）は存在する仕方（Art des Seienden）が違うだけであって、この世界に全くイデア界の痕跡が確認できなくなったとしても、そこからイデア界は存在しないと結論付けることはできないのだ。[26] これが一般的に経験論と呼ば

---

24) S. Schelling, F. W. J. *Einleitung in die Philosophie der Offenbarung*, in: Sämtliche Werke Band. XIII, hrsg. v. K. F. A. Schelling. Stuttgart: J. G. Cotta'scher Verlag, 1858, S. 132.

25) Vgl. ebd. S. 7.

26) Vgl. Schelling, F. W. J. *Philosophie der Offenbarung 1841/42*, bzw. Pauls-

れている哲学の限界であり、最終的には形而上学を放棄することにつながってしまう。シェリングは哲学を次のように定義している。「哲学の第一の前提は、存在に、世界に、叡智があるというものだ。哲学は、最初に、予定と自由をもって誕生した存在を前提する。私が叡智を求めるということは、意図して定立された存在を求めることと同じことなのだ」（筆者訳）。[27] つまり、哲学はその始めからそのような存在を定立した超越的な存在者を探しているのであって、これは、別の個所では、消極哲学が探していたものはそれ自身の中にはないと言い換えられている。[28] 消極性とは、実存の立場から、現実的に存在していない、存在可能性に留まっているという判断であり、消極哲学の帰結である絶対者の理念も、たとえそれがその内在的な現実性を主張しても、一端その枠組みの外に出れば、存在可能性でしかないのだ。

自我が自我を定立するという原理から出発し、知識、つまり、概念と存在の同一が可能なのは、自我の同一性ではなく同一性そのものに因るというのが同一哲学の出発点であった。理性とは絶対的な主観性と客観性の同一であり、存在することはそれらの量的差異であり、全てのものは理性の構成として、理性の内に存在する。絶対的な同一性或いは無差別は知的直観と呼ばれ構成の前提になっているが、しばしば誤解されているように、構成が直観によって行われているわけではない。知的直観は原理であっても方法ではない。消極哲学は直観で始まり知識で終わる。積極哲学は懐疑で始まり信仰で終わる。

Nachschrift, hrsg. v. M. Frank. Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1977, S. 147.

27) Schelling, F. J. W. *Urfassung der Philosophie der Offenbarung*, hrsg. v. W. E. Ehrhardt. Hamburg: Felix Meiner Verlag, 1996, S. 23. – „Die erste Voraussetzung der Philosophie ist, daß in dem Sein – in der Welt – Weisheit sei. Die Philosophie setzt ein Sein voraus, welches gleich anfangs mit Voraussicht, und Freiheit, entsteht. Ich verlange Weisheit – heißt soviel – als ich verlange ein absichtliches gesetztes Sein.“ (Ebd.)

28) S. Schelling, *Einleitung in die Philosophie der Offenbarung*, SW XIII, S. 132.

同一哲学において理性によって構成された、全てもろもろの存在するものの統一が絶対者という理念になる。つまり、構成する主体と構成された客体の同一性が反省されたものが絶対者或いは絶対精神と名付けられる。しかし、その運動は自己完結しているが故に、回転的であり、もちろん、それは私たちにとって可能的経験の時間、無時間的な時間であるが、理性は同一性を回復すると同時に理性自身であるために差異を定立することを繰り返している。[29)]

経験的には、現実的には、理性の同一性が回復されることは決してない。何故なら、有限な理性的存在者がその有限性を自ら克服することはあり得ないから。同一性の回復は終わりのない課題（die unendliche Aufgabe）となる。[30)]「それぞれの運動はそもそも休息の追求でしかない。（…）学問の終わりはいったいどこに探究することができるか？学問の終わりは、それ自らの本質を通して、あらゆるこの先の必然的な進展を破棄する何かにのみ求めることができる。知識が終わるのは、その何かにぶつかるときで、そこで人はそれがあるということしか言えないのだ」（筆者訳、下線部は原文のイタリック）。[31)] それがあるということ（dass es ist）はそれは何であるのか（was es ist）に対比させられ、前者は積極哲学を、後者は消極哲学を特徴づけている。[32)] それがあるという事実性は直接的には実存のことであるが、その実存は本質の実存であり、ここでは実存と本

---

29) Vgl. Schelling, *Urfassung der Philosophie der Offenbarung*, S. 92.

30) Vgl. Fichte, J. G. *Das System der Sittenlehre nach den Prinzipien der Wissenschaftslehre (1798)*, in: Sämmtliche Werke Bd. 4, hrsg. v. I. H. Fichte. Berlin: Verlag v. Veit u. Comp, S. 131.

31) Schelling, *Urfassung der Philosophie der Offenbarung*, S. 411-2. – „Jede Bewegung ist eigentlich nur Suchen nach Ruhe. (…) Wo ist nun dieses Ende der Wissenschaft zu suchen? Das Ende der Wissenschaft kann nur gesucht werden in etwas, das allen weitern notwendigen Fortgang durch seine eigene Natur aufhebt. Wohl ist das Wissen beendigt, wenn es auf etwas gekommen ist, von dem man bloß sagen kann, *daß es ist*.“ (Ebd.)

32) Vgl. Schelling, *Philosophie der Offenbarung 1841/42*, S. 99.

質の積極的な関係が仮定されていているので、両者の統一、さらには全体が存在そのもの（das Sein selbst/ das Ist）として究極的な信仰の対象になる。

積極哲学の出発点を理性は演繹することができない。純粋理性の外に非理性的な存在が定立されていることに、理性は当初呆然と立ち尽くすほかない。しかし、その存在の誕生は全く謎に包まれているわけではなく、神話が私たちに語り継いできた。[33] シェリングが神話を積極哲学の主題として取り上げた理由がここにある。それが神話の解釈ではなく、あくまで構成になるのは、経験を、歴史を前提としながらも、それらが成立する条件を、消極哲学、特に自然哲学の概念を用いて、つまり、三つのポテンツのダイナミックな関係から演繹しようと試みるからだ。例えば、シェリングは、もし神が存在するならばと断った上で、有神論、一神教、多神教を演繹し、更に、三位一体が宗教の本質的な形態であることを導入する。また、多神教にも同時的なものと継続的なものがあり、三つのポテンツの力関係が変化することが、プロセスの中で予見されている。神話の哲学だけを取り上げて、その型に実際の神話を当てはめると、それぞれのポテンツに神々を対応させることは、構成というよりも、連想になってしまうのであるが、なぜなら本質と実存は当初異質なものであるから、しかし、理性が、信仰によって、理性の働きである第二のポテンツが、ディオニソスであり、キリストとなること、その仲介的な働きは超越的なものに既に仲介されていても、全て存在するものは理性自身であること、理性とは正に神の存在可能性（Potenz）であること、これらのことをアポステリオリに認識した時、神話の哲学と啓示の哲学は、解釈でも連想でもなく、理性自身の構成であることが妥当する。

シェリングはヨハネ福音書の最初に言及されるロゴスを理性と同一視す

---

33)　Vgl. Schelling, *Philosophie der Mythologie*, SW XII, S. 154.

ることを避け、単に主題・主体（das Subjekt）と解釈している。[34] 彼はロゴスに叡智や言葉などの神秘的な意味を与えるのではなく、むしろ神話における同じ仲介的なポテンツの機能から、キリストの誕生、死、復活を説明しようとする。もちろん、この仲介的なポテンツとは理性のポテンツの一つであるが、ここで重要なのは、このポテンツが常に客観的な契機を構成している点だ。自然における第二のポテンツの最初の働きは光だった。それは物質から自由であっても物質として定立され、無機的自然から有機的自然、無意識の世界から意識の世界へのプロセスを媒介している。同じようにロゴスも啓示において自らを物質化・材料化（Materialisierung）していて、原罪から自由であるにもかかわらずそれを背負って十字架に架けられた。神の外の存在を再び神の存在に戻そうとするこの働きは正に手段的（instrumental）だと言える。短くまとめると、実存における理性の働きは元来、手段的・道具的であるのだが、その形式が内容から疎外されたものが目下「理性」と呼ばれているものだ。もう一度そのような理性の起源を問い直すことはまた、その本来の目的を問うことにもなり、その時、啓示の哲学が一つの仮定として再考に値すると筆者は考える。

主観性の循環から有限性をどのように理解するか

シュルツの論文、『シェリング後期哲学におけるドイツ観念論の完成』はシェリングの哲学を研究する者たちの間に、大きな議論を巻き起こした。それまでは、消極哲学から積極哲学への移行が一つの断絶と見なされていたのだが、シュルツはそれを貫徹と捉えたからだ。本質の実存から理性の現実性を、そして究極的には理性の事実性を問うシェリングの後期哲学は、ドイツ観念論がそもそもの初めから問題にしていた主観性の根拠を精鋭化したとシュルツは考えた。[35]「もし我々が一度全く率直に

---

34) S. Schelling, *Urfassung der Philosophie der Offenbarung*, S. 469.

35) S. Schulz, Walter. *Die Vollendung des Deutschen Idealismus in der Spätphilosophie Schellings*. Pfullingen: Verlag Günther Neske, 1975, S. 8.

精神史におけるシェリングの位置を問うならば、彼の中心的意味が我々にはっきり分かるだろう、その意味は、直接的な影響可能性や直接的な答えが与えられることにあるのではなく、晩年のシェリングに、この精神史において、それは主観性の歴史であるのだが、これを彼自身において完成するという任務が課されたことにある」（筆者訳）。[36] ここで、シュルツは完成（Vollendung）という言葉の中にある終わり（Ende）、有限性（Endlichkeit）を強調する。[37] そしてシュルツは主観性の運動が循環し始めることを指摘しているのだが、これは思考が反復に陥らざるを得ないことを意味する。[38] これ以上考えられない所まで考え抜いた思考は、これまで考えたことを再構成（Rekonstruktion）、これは昨今の哲学研究で非常によく使用される言葉であるが、するしかないのだ。

積極哲学は表向きには理性の哲学を標榜していて、シェリングも積極哲学があくまで学問であることを強調している。そしてその構成の主体も普遍的理性であるということになっている。しかし、実際は神話も啓示も普遍的理性には直接与えられていない。積極哲学において神話と啓示の哲学を構成しているのは、理性の哲学を起点として、膨大な文献を調査、研究したシェリングだとも言える。ここで狂信的な観念論者は、理性がシェリングという天才に働いて構成しているのだから、構成の主体はあくまで理性だと強弁するのだが、冷静に考えてみると、普遍的理性と有限的理性は弁証法的な関係にあることが分かってくる。私たちの思考は完全にアプリオリに考えることはできない。純粋な理性哲学というものも、完璧な積極

---

36) Ebd. S. 272. „Fragen wir einmal ganz schlicht nach dem Ort Schellings in der Geistesgeschichte, dann wird uns seine zentrale Bedeutung aufgehen, eine Bedeutung, die nicht in unmittelbaren Wirkungsmöglichkeiten und im Erteilen direkter Antworten liegt, sondern darin, daß dem späten Schelling in dieser Geistesgeschichte, welche die Geschichte der Subjektivität ist, die Aufgabe zufiel, diese in sich zu vollenden.“ (Ebd.)

37) S. ebd. S. 300.

38) Vgl. ebd. S. 272.

哲学というものもあり得ないのだ。

逆を言えば、ドイツ観念論と呼ばれる哲学が、その最も抽象的な形態においても、実存を問題にしていないということは全く当てはまらないのである。フィヒテは『知識学の原理に基づく倫理学の体系』の中で、全ての意識、そして本当の哲学は「現実的なもの」から始めると主張しているし、例えば、彼の提示する倫理学は、個人が独裁国家や不当な法律の基でさえ如何に道徳的に振る舞いうるかというところまで論じている。[39] 理性が主体である哲学を営んでいるのはフィヒテであり読者自身なのである。しかし、一方で、彼らの「現実」はその都度、理性の大きな運動の中に飲み込まれていく。そのような運動は規定や構成、止揚などと呼ばれていて、最後には存在するものの統一としての理性概念、つまり理念の現実性が主張されるのであるが、ここで晩年のシェリングはさらに違った現実性を語ったのであった。何故、在ることはそもそも在るのかと。[40]

この問いは絶対者も神も発することはできない。これは苦悩から出る、つまり現実性の否定から出る問いだからだ。ドイツ観念論の完成とは何か壮大な体系を完成したということではないし、それをもってたとえ哲学史の一つの終焉が語られたとしても、それによってその後の哲学的探究が文献研究に甘んじて良いというわけでもない。そうではなくて、その抽象的なぼんやりした出発点に具体的なはっきりした意識をもって連れ戻されるということなのだ。理性哲学から積極哲学への移行に際し、上述の存在そのものの意味を問う動機を、シェリングは以下のように吐露している。「全て起こることは、何か違うことが再び起こるために、そしてそれ自身が次のものに対して再び過去となるために、発生している、つまり、実際は、何かが発生することの意味はなく、そのような無意味さは、人間のあらゆる行為、努力、仕事に表明されている。(…) 正に人間こそが私を最

---

39) S. Fichte, *Das System der Sittenlehre nach den Prinzipien der Wissenschaftslehre (1798)*, S. 219 u. 239-41.

40) S. Schelling, *Einleitung in die Philosophie der Offenbarung*, SW XIII, S.7.

後の絶望的な問いに駆り立てていった」（筆者意訳）。[41] 積極哲学が自由な学問であることは既に言及された。その出発点は結局、哲学者自身がキリスト教を信じるか否かということに尽きるし、前述の無意味さというのは私たちが置かれている原罪の状態以外の何ものでもない。

さて、主観性の循環が意味あるものとなるためには、つまり、単なる機械的な反復ではなく、その思考がその都度、自らが始まりであり終わりであるような運動であるためには、一方で自我は絶えず可能な限り純化されていなければならない。他方、その運動の現実性を担保するために、私自身は非哲学的な仕方で世界と関わる必要がある。実存における、歴史における普遍的理性と有限的理性の弁証法的な関係を、一般的に考察することが形而上学に残された課題だと筆者は考える。時代によって変化する社会、文化の言葉を使いながらも、人間性の本質を注視し続ける、そしてそれを大学という学問に与えられた場所で発信し続ける責任が哲学者にはある。

パンデミック後の世界では道徳や倫理が重要になってくると主張する哲学者もいるし、「倫理資本主義」という新しい資本主義の形を提案する哲学者もいる。[42] あるインタビューでは企業に倫理の専門家を配置することが真面目に語られている。[43] そこには過剰な理性主義に基づく人間性への大きな誤解があると筆者は考える。また、そのようなアイデアが学者の名で、哲学者の名で、そして天才の名で公開されている事実は、本論文が議論した現代社会における学問の神話性の一例でもある。約10年前、我が

---

41) Ebd. - „[A] lles, was geschieht, geschieht nur, damit wieder etwas anderes geschehen könne, das selbst wieder gegen ein anderes zur Vergangenheit wird, im Grunde also geschieht alles umsonst, und es ist in allem Thun, in aller Mühe und Arbeit der Menschen selbst nichts als Eitelkeit: […] Gerade Er, der Mensch, treibt mich zur letzten verzweiflungsvollen Frage“. (Ebd.)

42) 「天才哲学者マルクス・ガブリエルが語る未来と倫理」、テレビ朝日、2021年7月14日。（https://news.tv-asahi.co.jp/news_international/articles/000222581.html）

43) 同上。

国でハーバード大学の哲学教授が人気になったことも記憶に新しい。大衆は科学を、学問を、理性を信奉しているので、常に崇拝できる偶像を求めている。そして、ここが問題の核心であるが、ガブリエル氏は未来について多くを語っても、ほとんど宗教を語らないのだ。[44] いったい宗教のない哲学などそもそも考えうるのだろうか？同様の問題意識をヴェイユは『根をもつこと』において、科学者に対してであるが、語っている。「真理に捧げられるべき宗教的な畏敬を科学に与えよと、学者は公衆に要請する。公衆もその言い分を信じる。だが公衆はだまされている。科学は真理の聖なる霊から生まれた結実ではない。注意をはらえさえすれば明々白々の事実である。科学的探究の努力は、一六世紀から今日まで理解されている意味にかぎるなら、真理への愛を原動力とはしていない。」[45]

科学にとって自然は思考の対象であり続けるし、それ自体は全く間違ったことではない。しかし、私たちの心と体を含めた生命の源としての大自然は、思考には到底捉えられるものではないし、思考の網にかかることによって、自然はその本来の姿を失ってしまう。カントはそれを物自体と呼び、フィヒテはまた非我と呼び、それは認識や支配が及ばないものであることを有限的理性に戒めた。今日、私たちの環境保護への意識は高まって

---

44) ガブリエル氏の一般書にはなるほど「宗教の意味」という章がある。宗教や神が抽象的に議論されていて、前者は「無限なもの（…）から、わたしたち自身への回帰」、後者は「どんなものも（…）けっして無意味でないという理念」にほかならないと定義される傍ら、世界と共にそれを超越する存在は否定されている。（マルクス・ガブリエル、『なぜ世界は存在しないのか』、清水一浩訳、講談社、2020年、220及び230頁。）つまり、そこでは歴史的な宗教や現実的な神について何も語られていないし、頻繁に引用されるキルケゴールの言葉もキルケゴールの意図に反して用いられている。キルケゴール哲学の根幹は、地上的なものへの絶望を契機にした自己意識の弁証法的な運動を、神の子であるイエスが誕生し、十字架に架けられ、そして復活した歴史的瞬間まで、同時性という概念によって導いて行くことで、そこで初めて神が存在するか否かが現存在の全実存を賭けた決定的な問題になる。無数にある「意味の場」というような次元の話ではないのである。

45) シモーヌ・ヴェイユ、『根を持つこと』、下巻、冨原眞弓訳、岩波文庫、2015年、106頁。

いるように見えるが、自然はもっぱら認識と支配の対象になってしまった。SDGsというスローガンが学校教育で流行になっているが、それがあくまで開発のための目標であることは、カラフルなロゴマークによって覆い隠されている。私たちと外的自然の関係は、私たちの私たち自身との関係、つまり人間の自己意識に条件付けられていることがまず理解されなければならないし、その自己意識はどこまでも内的自然を基礎としていることに気づかなければならない。自己疎外された人間が、その疎外を克服しようと、ますます自然をコントロールしようとする時、人間は自らの内にある自然を憎悪している。環境問題に対して努めて倫理的であろうとする表面的な態度は、ひょっとしたら良心の呵責の表れなのかもしれない。パンデミック後に道徳が重要になるというのは大きな間違いで、道徳は過去も未来もそして現在も、人間が精神的存在であるならば、疑いようもなく最も重要な事柄であったし、あり続けるのだ。限られたワクチンを奪い合う有様に「人間的自由の本質」があることを、今正に私たちは直視しなければならない。そして人間がこの危機に際して謙虚になり、真剣に命と死に向き合いながら生の意味を問うことによって、同時に科学技術や経済活動のあり方を見直すことによって、人間性の回復に努めなければならない。

Resümee

Zur Befreiung von der Wissenschaft als dem modernen Mythos
oder
Überlegungen über die Grenze des Deutschen Idealismus und die Verantwortung eines Philosophen

In dieser Abhandlung wird die vermeintliche Objektivität der Wissenschaft, die vonseiten der Naturwissenschaften nachdrücklich gepflegt worden ist, infrage gestellt sowie die herrschende Tendenz, die Intelligenz oder was vernünftig genannt wird hochzuschätzen. Die Pandemie enthüllt das feindliche Verhältnis des Menschen zur Natur. Die Menschen haben keinen Kompass mehr außer der technischen Vernunft, die in der Gesellschaft jetzt mythologisch funktioniert. Wir glauben blind daran, was sich als Wissenschaft ausgibt, in der sich die vergangene Absolutheit der Vernunft noch zu manifestieren scheint. Alsdann wird gefordert, die Grenze des menschlichen Wissens erneut zu prüfen, was schon voraussetzt, dass es etwas geben kann, das weder *a priori* noch *a posteriori* gewusst wird, sondern das nur geglaubt wird. Nach der letzten Frage der Metaphysik, die in der positiven Philosophie Schellings ihren kritischen Punkt erreicht und die allein durch die Offenbarungsgeschichte beantwortet werden kann, beginnt die Subjektivität, um sich selbst zu kreisen. Jedoch kann die kreisartige Denkbewegung immer neu werden, wenn ich ein lebendiges Verhältnis zur Wirklichkeit bewahre. In der Krise ist es die Verantwortung der Metaphysiker, die Menschheit zu Wort kommen zu lassen, aber nach ihrer Bewältigung keineswegs die Utopie zu propagieren.